

学 位 論 文 の 要 旨	
氏 名	孟 憲 晨
学位論文題目	島嶼における自然災害と地域社会 —奄美大島住用地区の事例を中心に—
<p>本論文は、自然災害による被害の防止や軽減のために、地域で行なわれている災害時や災害後の対応と、日々の生活の中での住民の防災意識、そして防災対策などの実態について、奄美大島における事例をもとに、文化人類学的あるいは災害の人類学的研究手法により記述・考察したものである。特に、2010年10月20日の奄美豪雨災害に見舞われた奄美市住用町（旧住用村）を対象に、防災という観点から自主防災組織のある集落とそうでない集落における豪雨災害時の状況を詳細に記述し、その上で、住用地区における地域社会と防災の問題について、個人、地域活動、自主防災組織、支援者と被支援者、高齢者という視点から分析し、「社会的脆弱性」や「災害との共生」といった問題について考察した。</p> <p>本論文の各章の内容は以下の通りである。</p> <p>序章では、本研究の目的を、島嶼における自然災害に関する研究、しかも復興ではなく防災の人類学的研究として位置づけるとともに、本研究の調査地として奄美大島を選択する意義について触れた。</p> <p>第1章「奄美社会と自然災害」では、奄美大島の概要や奄美群島の自然災害の歴史を資料に基づいて記述し、その被害の特徴や災害の変容について述べた。</p> <p>第2章「奄美市住用地区における自然災害と防災」では、2010年10月に豪雨災害に見舞われた奄美市住用町（旧住用村）を対象に、過去の自然災害の大まかな歴史を概観した後、豪雨災害時と災害後の状況を詳細に記述し、自然災害に対する地域の取組について述べた。</p> <p>第3章「自主防災組織と地域社会」では、地域の自主防災組織と防災について、2010年の奄美豪雨災害以前から自主防災組織が存在した4集落について、その災害時や災害後の支援の実態について詳述した。また、同じく2010年の奄美豪雨災害で、自主防災組織が機能して犠牲者を一人も出すことがなかった奄美市知名瀬地区の事例を取り上げ、それとの比較で住用地区の特徴を分析した</p>	

第4章「日常生活と防災」では、奄美豪雨災害以前に自主防災組織のない住用地区の集落の防災に関する事例を取り上げ、実際の豪雨災害時の住民の対応についての詳しい記述をもとに、日常生活において住民たちが取り結んでいる社会関係について考察した。

第5章「地域活動と防災」では、年中行事や祭り、地域イベントなどの地域活動についていくつかの集落の事例を詳しく記述し、それをもとに、地域活動と住民の社会関係の構築や防災との関係について考察した。

第6章「考察」では、調査地の大きな特徴として過疎化、高齢化の問題があり、また、自然災害時の防災の現状として、高齢者が高齢者を支援するという「老老支援」の現実があることについて述べた後、この「老老支援」の問題を「社会的脆弱性」の視点から考察した。さらに、災害を日常との連続性と捉える観点から、調査地の社会を「災害と共生する社会」と捉え、その共生の文化的仕組みについて考察した。

結論では、「老老支援」という現実が、現在の奄美社会の「社会的脆弱性」を最も先鋭に象徴する現象であることや、この「老老支援」や「災害との共生」という認識の重要性について述べた。

